石桜同窓会報

石桜同窓会
盛岡市長田町
岩手高等学校内
振替盛岡3936
印刷山口北州印刷

創立60周年記念事業

校舎 体育館 プール完成

◇…屋外の寒風をよそに、新築の体育館の中は今日も熱気で一杯である。…◇
◇…バスケットやバレーの部員が体育館の天井からつるされた仕切りの…◇
◇…ネットを境にして三面同時に使い練習に余念がない。力一杯のシュ…◇
◇…ートや思い切ったパスをするときの生徒の眼の輝きは、西日に映え…◇
◇…る真新しい床の輝き以上だ。

ピカピカ体育館で生徒にも異変？

五一六坪の体育館ができて、たしかに学校の様子は変った。旧体操場には自由時間中あまり縁のなかった生徒までが、昼休み、球技に加わるようになった。高い天井のもと、伸び伸びと練習する生徒を見守る先生たちの満足げな顔をみると宿願の体育館完成の喜びが実感として理解できる。

新鋭のトレーニングマシン

廊下をへだてて一階にはさらにトレーニングルームがある。真黄色に塗装した最新鋭のトレーニングマシンが並んでいる。

体位の成長著しいいまの生徒たちが、オリンピックや世界アルペン、いや国体に勝つためには、なるほどこんな道具が必要なのかと戦前生まれの同窓生は驚く代物である。

合同教室にはパソコンも

2階は普通教室や英語教育のLL教室。3階には流し場つきで、書道教室にも使われるという特別教室やNECのパソコン6台を設置した合同教室がある。

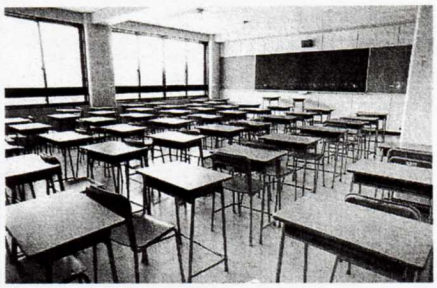
12月24日同窓会理事会開催の日、理事30数名は学校側の案内で、これらの完成なった施設を見学した。

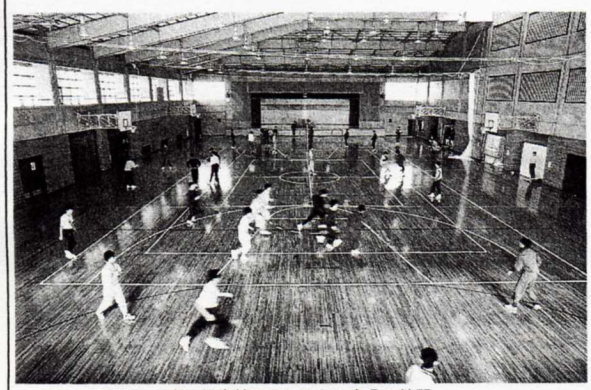
先代三田義清理事長念願の校舎・体育館・プールは昭和六十二年四月着工以来五億七千万円の巨費によって昨年十二月完成をみたのである。自己資金一億五千万円・借入金三億五千万円のほか、同窓生各位の熱意の賜物である二千五百万円が醵金された。

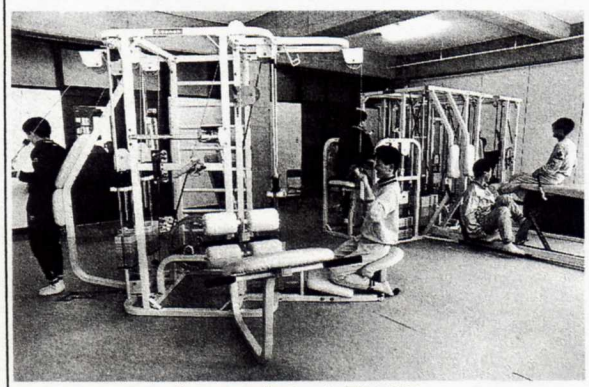
3月8日の卒業式は新体育館で行われようとしており、各種新教室も4月からの使用が待たれている。

試験問題作成にもひと役のパソコン

最新設備のＬＬ教室


4月からの利用を待つ新教室


広い体育館でこれからは存分に練習


トレーニングマシンも有効に活用

岩手中・高等学校 三大綱領

積慶・重暉・養正について

石桜同窓会々長 松見 得明

先般（昭和六二・一〇・二四）東京石桜同窓会総会の招きに応じて参上したときのことである。

歓談の席で新制高校卒の人達と話していたとき、談たまたまラグビー部のことに及び、某氏から部歌の歌詞の中に「三綱」という言葉があるがどういうことかという質問があった。

この人達は戦後生まれで「三綱」についての教えをうけていなかったので、その意味内容が解らないままに歌いついできたのである。従ってどういう字を書くのかも知らないわけである。

そこでまず紙に、積慶重暉 養正の三綱領を書いてみせたのであるが、養正はその字の示すように正を養うのであるから正義の心を養うということのようだと見当がついたようであった。しかし積慶については考えあぐね、重暉に至っては意味はもちろん、読み方さえわからず私の解説を促すのであった。

積慶とは慶（よろこび）を積み重ねるということ。重暉とは暉（かがやき）を重ねるという意味。養正とは正を養い育てるということで型通り説明はしたものの、三綱領の出典、校是として採択した理由根拠、さらに校歌との関連については定かでない所があり、即答しかねるものがあったので、いずれよく調べてから石桜会報に掲載するからと約束して別れたのであった。

帰盛するや直ちに母校を訪れ、三綱領についての記録の有無を確かめたところ〝あった！あった！〟「私達一回生が二、三年の頃初代鈴木卓苗校長が朝礼訓話三回に亘って説き聞かせられた速記録が〝石桜〟四号、五号、六号に載っていたのである。読みかえしてみると朧気ながらその当時のことがよみがえってきた。

今その記録と思い出を辿りながらペンを執っている次第である。

それによるとこの校是三綱領は神武建国の三大綱に出據をおくものであることが記されているが、ここには出據原典抄出の煩をさけ、校長訓話によりその大要を述べることとする。

㈠〝積慶（せきけい）〟については石桜第四号の巻頭言に

これを神武建国の三大綱に見る。「慶（よろこび）を積み重ねたる皇国」云々と記し、国家民人の積慶和楽を基本とする国家形成の理念とその余沢が述べられている。而して岩中創設に伴う校風形成に当って「我等の学校は校風の基礎に此の国風を容れて慶を千載の下に積まむとするものなり。慶びありて栄えあり、栄えありて人材成るなり。努めよや。」（昭三・九・一太空記）となっている。即ち校風形成の指向目標の一つをこれにもとめ、もって生徒をして積慶和楽の社会建設の有為なる資たらしめようとしたものであることがわかる。

㈡ 重暉（ちょうき）

暉とは太陽の「暉（かがやき）」を意味し一度光りの射すところ暗愚蒙昧の迷雲はれ、万象の真の相（すがた）が見とおされる。光りは知識ではなく知慧である。利害得失に執着する限り、物の虚実を見究めることはできない。鈴木校長はここに思いを至して知識偏重を排し、叡知の伸張を基礎とする人材の育成を企図したのである。

㈢ 養成（ようせい）

正は邪悪を糺（ただ）し真善をすすめ顕わすことであり、人倫の基本をなすものである。しかも人間自（おのず）から索（もと）めてやまないものであるが、自他ともにこれを養い拡充しなければ、社会秩序、人道の公正は期すべくもない。よって若きよりその旨を養い、もって国家社会有為の材たらしめんと「養正」を掲げ、生徒育成の一指標としたのである。

以上母校の三綱領の依って来る所、その意味するものを簡潔に述べ、ご質問への答えを試みたのであるが、省みてご納得いただけるものであるかどうか危惧するところである。

率直にいって、当時の神武建国という皇国史観に立脚する三大綱に依據して立てられた校是という点に主権在民の今日的意識からは抵抗を覚えるかもしれない。しかし視点をかえて母校が生成発展し、光輝ある伝統を継承しきった歴史過程をみるとき、徒らに皇国史観にとらわれず、時処所縁に応じて恒に公正にして純美な校風を発揚して今日に至っていることを思うべきである。

校歌と三綱領との関連について

石桜第十四号の記載によれば次のように述べられている。

「私は本校々歌を作成する時に、作者の土井（つちい）先生（土井晩翠先生）に、本校々風の三大綱領たる重暉と積慶と養正の三つをその中に読み込むように申し入れたら、先生は詩人であるから、之を取り直して神と祖国と人道の三つに言い替えられた次第である。」と述べ、暉は神の威徳の表徴であり、慶は祖国の余沢、正は正義で人道の根幹であることから神と祖国と人道の三つにつかえて……となったと説き、諸子はこの三つの語は本校々風の三大綱領を寓するものなることを省察し、大いにこの精神を発揚されたいものである。と結んでいる。

これは昭和四年六月十三日、十四日、十六日の三回に亘って鈴木初代校長が朝礼訓話に話されたものである。この校長達意の一文を読めば三綱領を端的に三綱領の何たるかを理解されることと思う。

私は校歌を歌う度毎に全国高校多しといえどもこれほどの校歌をもつ高校はあるまいと思うのであるが、「豈唯我一人のみならんや」と公言して憚らないところである。

以上韮才不敏にしてその要を得ないものであるが会員各位のご賢察を請いつつこの稿を終る。

（昭六二・一一・二五）

60周年記念事業募金 醸金者芳名

校舎増築・体育館・プールの建設をめざして同窓会の募金は昨年五月スタートしたが、同窓会理事会は目標額三千万円の達成を図るため、当初の〆切を本年三月末日まで延長することを決定、なお有志の醸金が続いています。二月末日現在卒業外教職員の芳志を含め二千五百一九万五六二〇円に達しました。

ここに開始当初からの醸金者ご芳名を掲載します。

なお、この合計額とは別にPTAからも二百八十八万七千円の醸金がありました。

旧1回生
遠藤賈中
大澤賈
太田俊雄
太田代
小原安治
鎌田省一
川畑篤司
菊地常雄
儀俄馨
久喜正男
工藤壽一
昆正助
斉藤久四郎
下杉定人
杉村昌三
高木信明
高橋兵吉
稗貫誠一
古舘哲郎
藤原郁敏
中村益三
富手六郎
玉山恵
立花正三
柴内興宗
佐々木秀夫
佐々木長一郎
工藤長一
菊池万雄
小田島勝隆
大沢善吉
大澤幸平
諸谷泰仙
山岸忠兵衛
一條龍彦
目時隆太郎
三好太郎
松田二郎

旧2回生
大竹俊一
岡田誠
川村芳夫
佐藤新平
高橋芳雄
帯刀美知男
戸嶋正夫
土井尻正次
中島幹
中野喜一
新渡戸泰
萩野愛
米島重悦
一条威
石井三雄
浅沼農吉
吉村耕造
田里茂孝
向井田勘蔵
道又弥平
八角英二
吉嶽益朗
小野整治
加藤英夫
熊谷龍男
作田秀穂
佐藤全一
丹野寅雄
橋本肇
目時国男
武蔵米蔵
三島肇
中村達敬
萩原弘毅
長谷川行雄
山口源吉
大沢万治
加藤順底
鈴木龍雄
三浦正雄
柳沢正夫
石亀浩道
伊藤光次郎
遠藤静行
金田栄一
菅野芳夫
工藤彌兵衛
佐々木文勲
佐々木益人
高橋武男
津軽石義雄
中村忠雄
沼川武雄
阿子島寛

旧3回生
宮台福太郎
稲村卯橘
猪原光一
小田島順
小田島正雄
工藤一郎
佐々木一
杉本善
高橋功
俵田國夫
沼田正夫
藤沢省三

旧4回生
目時隆太郎
諸谷泰仙
山岸忠兵衛
一條龍彦
大澤幸平
大沢善吉
小田島勝隆
菊池万雄
工藤長一
昆正助
斉藤久四郎
佐々木長一郎
佐々木秀夫
柴内興宗
立花正三
玉山恵
高橋兵吉
高木信明
杉村昌三
下杉定人
久喜正男
儀俄馨
菊地常雄
川畑篤司
鎌田省一
小原安治
太田代俊雄
太澤賈勇
三好太郎
松田二郎

旧5回生
小野整治
吉嶽益朗
八角英二
道又弥平
小笠原嵩
太田平八
石川忠一
小笠原八
兼平竹次郎
駒井幸蔵
柏原容夫
大澤靖
一戸成光
金子源一
加藤金二
岩根孝一
池ノ谷忠正
吉田堯
武蔵喜治
水本祐一
三島勘一
高橋啓介
佐々木哲孝
北田京一
小原啓三郎
飯高肇
有原隆司
赤川義英
和山謙一
山口徳治郎
藤原康
藤村司
藤村勲
福士久也
原章
西家寛
津軽石保
大銑地久男
玉沢佳巳
田中利昌
高橋一司
佐藤至孝

旧6回生
大沢万治
加藤順底
鈴木龍雄
三浦正雄
柳沢正夫
石亀浩道
伊藤光次郎
遠藤静行
金田栄一
菅野芳夫
工藤彌兵衛
佐々木文勲
佐々木益人
高橋武男
津軽石義雄
中村忠雄
沼川武雄
阿子島寛

旧7回生
米島重悦
萩野愛
新渡戸泰
中野喜一
土井尻正次
戸嶋正夫
帯刀美知男
高橋芳雄
佐藤新平
川村芳夫
岡田誠
大竹俊一
一条威
石井三雄
浅沼農吉
吉村耕造
田里茂孝
向井田勘蔵
道又弥平
八角英二
吉嶽益朗
小野整治
加藤英夫
熊谷龍男
作田秀穂
佐藤全一
丹野寅雄
橋本肇
目時国男
武蔵米蔵
三島肇
中村達敬
萩原弘毅
長谷川行雄
山口源吉
大沢万治
加藤順底
鈴木龍雄
三浦正雄
柳沢正夫
石亀浩道
伊藤光次郎
遠藤静行
金田栄一
菅野芳夫
工藤彌兵衛
佐々木文勲
佐々木益人
高橋武男
津軽石義雄
中村忠雄
沼川武雄
阿子島寛

旧8回生
小田島順
小田島正雄
工藤一郎
佐々木一
杉本善
高橋功
俵田國夫
沼田正夫
藤沢省三

旧9回生
相田兼三
吉田毅
玉山恵
立花正三
柴内興宗
佐々木秀夫
佐々木長一郎
工藤長一
菊池万雄
小野整治
加藤英夫
熊谷龍男
作田秀穂
佐藤全一
丹野寅雄
橋本肇
目時国男
武蔵米蔵
三島肇
中村達敬
萩原弘毅
長谷川行雄
山口源吉
大沢万治
加藤順底
鈴木龍雄
三浦正雄
柳沢正夫
石亀浩道
伊藤光次郎
遠藤静行
金田栄一
菅野芳夫
工藤彌兵衛
佐々木文勲
佐々木益人
高橋武男
津軽石義雄
中村忠雄
沼川武雄
阿子島寛

旧10回生
高橋光雄
河島醇
小田中基
小沢東
大田正弘
遠藤秀雄
堀切弘士
原正恭
長谷川行雄
萩原弘毅
中村達敬
中市照安
土川一男
高橋秀夫
鷹木立雄
鈴木新一
鹿内武雄
川村祐
軽石正夫
兼平竹次郎
小笠原嵩
太田平八
石川忠一
赤坂俊夫
大志田武
大澤得次郎
岩田栄
東根清蔵
村上和夫
南澤君平
松尾景康
藤村清一
西村金二郎
高山祐
下斗米昌一
佐藤武夫
菊池強
鎌田次郎
金沢修一
大澤徳太郎
黄傅明
伊藤重臣
石澤勉
荒木忠三郎

旧11回生
赤澤敏雄
一戸凱里
大平慶次郎
小笠原順二
小沢甚一郎
国定貢
久保田了康
北舘裕
有原孜
阿部一郎
秋津寿男
吉田弘
若山忠一

旧12回生
八重樫金十郎
長沢善三郎
土佐行作
谷村喜右ェ門
瀬野尾善夫
瀬川修一
澤田耕
佐藤誠一郎
佐々木甲子夫
斎藤昌一
熊谷梅作
熊谷敬
花館英世
中島昭
立花弥太郎
立花肇
武田耕太
高橋重郎
鷹觜達衛
佐藤和照
佐々木和作

旧13回生
大西博
小野一成
川村壽一人
工藤四郎
佐々木四郎
澤野亮二
徐耀喧
諏訪武夫
佐々木丈
金子源一
菊池忠夫
金田一皐造
桑野一郎
佐々木昭二
澤田光司
高橋正彦
高谷一郎
千田成二
千葉昌次
辻公一郎
吉田大三
赤坂祐三
名井弥七
滝政夫
高橋健太朗
鈴木広治
杉江忠之助
杉江憲造
下村幸男
石川欣司
五日市義巳
岩泉明
榎本雅安
大矢哲夫
大山芳夫
小笠原脩三
小山田行男
河村透
黒沼正三郎
斉藤克哉
坂下義了
佐々木睦郎

旧15回生
阿部定雄
一戸成光
加藤金二
柏原容夫
駒井幸蔵
川村友八
鎌田禎
大澤靖
大村次尚
石川忠一
小笠原嵩
太田平八
兼平竹次郎
鹿内祐
川村武雄
輕石正夫
鈴木新一
鷹木立雄
高橋秀夫
川村和夫
南澤君平
松尾景康
藤村清一
西村金二郎
高山祐
下斗米昌一
佐藤誠一郎
佐々木甲子夫
斎藤昌一
熊谷梅作
熊谷敬
花館英世
中島昭
立花弥太郎
立花肇
武田耕太
高橋重郎
鷹觜達衛
佐藤和照
佐々木和作

旧16回生
似内和夫
藤沢芳雄
湯沼昭典
猪狩康三
池野了介
石川欣司
五日市義巳
岩泉明
榎本雅安
大矢哲夫
大山芳夫
小笠原脩三
小山田行男
河村透
黒沼正三郎
斉藤克哉
坂下義了
佐々木睦郎

旧17回前期
大澤得次郎
岩田栄
横矢毅
村井孝
藤原仁左衛門
鶴飼賢一
駒嶺功
佐藤良雄
高橋龍雄
立花幹雄
盛合毅
東根清蔵
谷村喜右ェ門
瀬野尾善夫
瀬川修一
澤田耕
佐藤誠一郎
佐々木甲子夫
斎藤昌一
熊谷梅作
熊谷敬
花館英世
中島昭
立花弥太郎
立花肇
武田耕太
高橋重郎
鷹觜達衛
佐藤和照
佐々木和作

旧18回生
大矢哲夫
大山芳夫
榎本雅安
遊座運之助
八重柏政美
水上昭治
細田祐司
細川豊
藤本徳文
畑本光昭
猪狩康三
池野了介
石川欣司
五日市義巳
岩泉明
榎本雅安
大矢哲夫
大山芳夫
小笠原脩三
小山田行男
河村透
黒沼正三郎
斉藤克哉
坂下義了
佐々木睦郎

旧17回後期
小山茂男
小野寺満
金子源一
加藤金二
岩根孝一
池ノ谷忠正
吉田堯
武蔵喜治
水本祐一
三島勘一
高橋啓介
佐々木哲孝
北田京一
小原啓三郎
飯高肇
有原隆司
赤川義英
和山謙一
山口徳治郎
藤原康
藤村司
藤村勲
福士久也
原章
西家寛
津軽石保
大銑地久男
玉沢佳巳
田中利昌
高橋一司
佐藤至孝

第1回生
福士俊朗
花館英世
中島昭
立花弥太郎
立花肇
武田耕太
高橋重郎
鷹觜達衛
佐藤和照
佐々木和作

第2回生
宮手善三郎
村井孝一
石村圭
石川裕七
池野和夫
池ノ谷賢正
阿部賢
三浦義三
野村誠
高橋啓介
佐々木哲孝
北田京一
小原啓三郎
飯高肇
有原隆司
赤川義英
和山謙一
山口徳治郎
藤原康
藤村司
藤村勲
福士久也
原章
西家寛
津軽石保
大銑地久男
玉沢佳巳
田中利昌
高橋一司
佐藤至孝

第3回生
関井宏
玉山惣一
中村正孝
萩原幸典
日向敏
藤村敏
細川豊
細田祐司
畑本徳文
畑本光昭
猪狩康三
池野了介
石川欣司
五日市義巳
岩泉明
榎本雅安
大矢哲夫
大山芳夫
小笠原脩三
小山田行男
河村透
黒沼正三郎
斉藤克哉
坂下義了
佐々木睦郎

旧18回生
下越田益男
四戸孝丸
小林徹生
川村精志
木村恒三
斎藤孝一
斎藤昭
高橋精四郎
薩野信篤
佐々木栄一
武蔵喜治
水本祐一
三島勘一
高橋啓介
佐々木哲孝
北田京一
小原啓三郎
飯高肇
有原隆司
赤川義英
和山謙一
山口徳治郎
藤原康
藤村司
藤村勲
福士久也
原章
西家寛
津軽石保
大銑地久男
玉沢佳巳
田中利昌
高橋一司
佐藤至孝

小山田新平
井藤博
伊藤虎之助
木下善三郎
兼田弘一
小山茂男
小野寺満
金子源一
加藤金二
岩根孝一
池ノ谷忠正
吉田堯
武蔵喜治
水本祐一
三島勘一
高橋啓介
佐々木哲孝
北田京一
小原啓三郎
飯高肇
有原隆司
赤川義英
和山謙一
山口徳治郎
藤原康
藤村司
藤村勲
福士久也
原章
西家寛
津軽石保
大銑地久男
玉沢佳巳
田中利昌
高橋一司
佐藤至孝

第4回生
阿部敬一
米沢祐吉
吉田光政
伊藤虎之助
加藤恒一
川村重三
木村精志
小林徹生
上野勝彦
岩渕一
伊藤寛康
工藤正一
大森隆
金田一隆
清見全弘
亀山賢
上川公
加藤恵
小山田良雄
小野寺哲
小笠原等
大橋義平
村上昇
吉田敬一郎
吉田耕勉
吉田陽
吉田正
日向幸
藤村敏
細川豊
細田祐司
畑本徳文
畑本光昭
猪狩康三
池野了介
石川欣司
五日市義巳
岩泉明
榎本雅安
大矢哲夫
大山芳夫
小笠原脩三
小山田行男
河村透
黒沼正三郎
斉藤克哉
坂下義了
佐々木睦郎

旧18回生
下越田益男
四戸孝丸
小林徹生
川村精志
木村恒三
斎藤孝一
斎藤昭
高橋精四郎
薩野信篤
佐々木栄一
武蔵喜治
水本祐一
三島勘一
高橋啓介
佐々木哲孝
北田京一
小原啓三郎
飯高肇
有原隆司
赤川義英
和山謙一
山口徳治郎
藤原康
藤村司
藤村勲
福士久也
原章
西家寛
津軽石保
大銑地久男
玉沢佳巳
田中利昌
高橋一司
佐藤至孝

第5回生
浅賀康正
秋浜悟史
吉田好
吉田公雄
八重樫昌宏
村上統健
藤澤良雄
福田博臨
福田昇
花坂宗三
長野希一
田中博
木村栄作
菊地清
川村昌司
小田島昭夫
梅津敏昭
高橋善信
高山元一
鈴木敬治
関松久男
丹内禅海
千葉正信
中村光男
細川盤夫
原健生
泉澤敬也
伊藤一雄
牛崎修治
海老由浩
阿部秀充
熱海宏佑
大村純一郎
岡本源一
荒谷栄恵
高村哲郎
滝村和雄
高橋利男
高橋民明
諏訪道次郎
柴内興昭
佐藤美雅
佐々木幸男
斉藤宏
近藤義彦
小林陵二
小泉泰助
熊谷弘
工藤裕作
木村清
菊地昌
川村司
小田島昭夫
梅津敏昭

第6回生
宇夫方康夫
吉田耕勉
吉田陽
吉田正
日向幸
有原正巳
渡辺真由美
米倉司陛
佐々木美隆
佐々木美靖
小林克行
木下茂
菊池佑治
小田島康雄
小田島城二
小田山敏
大山信雄
上野安一
安西弘次
荒谷栄恵
浅賀康正
秋浜悟史
吉田好
吉田公雄
八重樫昌宏
村上統健
藤澤良雄
福田博臨
福田昇
花坂宗三
長野希一
田中博
木村栄作
菊地清
川村昌司
小田島昭夫
梅津敏昭

浦田隆
宇夫方康夫
吉田耕勉
吉田陽
吉田正
日向幸
有原正巳
渡辺真由美
米倉司陛
佐々木美隆
佐々木美靖
小林克行
木下茂
菊池佑治
小田島康雄
小田島城二
小田山敏
大山信雄
上野安一
安西弘次
荒谷栄恵
浅賀康正
秋浜悟史
吉田好
吉田公雄
八重樫昌宏
村上統健
藤澤良雄
福田博臨
福田昇
花坂宗三
長野希一
田中博
木村栄作
菊地清
川村昌司
小田島昭夫
梅津敏昭

大森敬一郎
宇夫方康夫
吉田耕勉
吉田陽
吉田正
日向幸
有原正巳
渡辺真由美
米倉司陛
佐々木美隆
佐々木美靖
小林克行
木下茂
菊池佑治
小田島康雄
小田島城二
小田山敏
大山信雄
上野安一
安西弘次
荒谷栄恵
浅賀康正
秋浜悟史
吉田好
吉田公雄
八重樫昌宏
村上統健
藤澤良雄
福田博臨
福田昇
花坂宗三
長野希一
田中博
木村栄作
菊地清
川村昌司
小田島昭夫
梅津敏昭

第7回生
細川盤夫
原健生
泉澤敬也
伊藤一雄
牛崎修治
海老由浩
阿部秀充
熱海宏佑
大村純一郎
岡本源一
荒谷栄恵
高村哲郎
滝村和雄
高橋利男
高橋民明
諏訪道次郎
柴内興昭
佐藤美雅
佐々木幸男
斉藤宏
近藤義彦
小林陵二
小泉泰助
熊谷弘
工藤裕作
木村清
菊地昌
川村昌司
小田島昭夫
梅津敏昭

第8回生
小田島基
小川宗作
吉村昌平
村井庫知
古川義
山浩一
東野久松
野崎弘志
南黒澤實
中村勝美
照井昭治
田沼斉
佐藤幸
高宮隆治
高橋清逸
高橋孝司
坂本義邦
菊池孝
小林隆
川村滋
小長龍生
岡内貞之
大村源一郎
海老由浩
牛崎修治
伊藤一敬也
泉澤秀充
阿部宏佑
細川盤夫
原健生
中村光男
千葉正信
丹内禅海
橋本蘭
立木正
高松初
関田久雄
鈴木敬治
沢口文男

第9回生
根澤弘巳
長沢寿守
長坂良一
谷村誠一
多田清吾
田代国洋
竹花得夫
高橋賢
佐々木巌
鎌田耕一郎
佐藤甚三郎
兼平勉
片岡充
小田島基
小川敦
吉村作
本間昇
本田幹雄
本田平
本田昌
本田庫
本田知
本田義
本田重
本田皆
本田祐三
本田臣
本田利
本田彦
本田清
本田洋
本田国
本田竹
本田花
本田得
本田夫
本田巳
本田亥
本田一郎
本田哉
本田一
本田豊
本田誠
本田彦
本田毅
本田清
本田鎖
本田久
本田雄
本田男
本田敬
本田治
本田文
本田男

榎本喜七
岡本雄二
小山田邦久
亀島捷三
菊地俊一
小林泰宏
佐々木俊司
佐々木久夫
佐藤英克
澤田重安
澤村廣美
高橋章
武田英二
太田節郎
飯塚隆一
村井栄輔
横坂衛
横矢裕
馬場英彦
西村紀昭
中村卓郎
中里行雄
土村雅彦
玉山哲吏
高城邦夫

第12回生

山口祐定
山岸道利
村井金一
府田隆一
加藤奉栄
鎌田静稔
久保田克
斉藤愈
斉藤勲
佐々木重男
斉藤祐一
佐藤信雄
佐々木弘吉
佐々木一巳
昆司
小林碩隆
小岩謙一
黒沼芳朗
菊池康弥
阿部久佐
吉田久司
横沢大造
矢羽々俊雄
八重樫洋
三浦敏彦
藤村宏士
藤田秀郎
福田武彦
福島裕也
日野杉昭雄
長谷川哲吾
舘沢秀徳

第14回生

米内正巳
阿部軍治
池野正幸
阿部信行
佐藤威徳
佐藤純悦
猿舘宣明
高橋宏輔
田中紀平
沼田英雄
花坂定孝
南沢満雄
八重樫俊一
須貝雅衛
石川隆三郎
及川紘悦
遠藤健
小笠原克夫
小笠原栄一
小笠原一
小笠原宏司
工藤誠
菊地治雄
菊池敬志
重茂佳伸
小笠原郁夫
石井隆
中野敦夫
中村光紀
杉村衛
滝浦和夫
千代川泰久
佐々木哲郎
小松貞一
久保勝彦
白井輝男
佐藤哲郎
吉田正
吉田武
吉田正次
吉田昭
菊地俊
木村勝一
菊地輝之
木村昌彦
藤村正一
藤原信
藤原文治
藤原鋼二
藤原博
菅野幸
川村良
刈屋収
兼平重一郎
小原紀彰
小笠原栄一
小笠原克夫
葛原宏治
熊谷義重
小苅米淳一
小笠原徳雄
小笠原久夫
及川清吾
井上敬久司
伊藤千代志
一条悟朗
山屋彰男
古谷広太郎
藤原博
藤原鋼二
平井敬久
東光紀
中村敦夫
中野泰久
滝浦和夫
杉村衛
須貝雅宏
荒谷昇
吉田正優
吉田正範
吉田武
八重樫昭
上吉田正
上野吉晨
渡辺邦彦
矢沢俊夫
武藤正吾
宮崎昇
松崎修三
広瀬良二
名郷根芳徳
中村栄孝
瀬川隆司
佐藤誠郎
佐藤信雄
佐々木弘吉
佐藤一巳
昆司
小林碩隆
小岩謙一
黒沼芳朗
菊池康弥
阿部久佐
吉田久司
横沢大造
矢羽々俊雄
八重樫洋
三浦敏彦
藤村宏士
藤田秀郎
福田武彦
福島裕也
日野杉昭雄
長谷川哲吾
舘沢秀徳

第15回生

高橋哲夫
高橋保
須賀靖朗
里見一栄
佐藤和洸
斎藤篤弥
小笠原二
今勝一
斎藤篤
小笠原久夫
内館政光
渡辺俊
三田利之
水本紘一
松舘剛
鱒沢義
藤村彦
藤村昌
藤村正一
藤沢進
似内裕
佐々木信
佐々木重夫
佐藤誠
栃内秀
田沼彦
武田昇
鈴木隆
佐々木弘
榊初正
肥田志
久慈秀
義昭
北栃英
角舘徹
小田島幸
小田島隆三
大井志
村上正
三上吉
前川晨
藤原彰
藤根和
藤尾弘
藤枝康
藤平順
長野一
中沢均
照井正
高橋志
柴内博
佐々木興
佐藤信
佐藤雄
佐々木弘
佐々木吉
昆司
後藤巳
斎藤尚
小綿泰
興津樹
小笠原生
小笠原紀
大沢美
浦成
波和之
砂子田康
岩田進
牛崎明
大図一
大森仁
岡田泰
小田島敬
小山田祥
鎌田榮
佐藤司
斎藤孝
柴内雄
高橋信
高橋重
田中和
花井健
千葉一
松崎満
三田地夫
高松泰
白土邦
近藤一
遠藤司
阿部均
阿部寛
明戸優
渡辺雄
米倉健
吉一
森田一
佐藤典
小野司
渡辺均
吉田賢
向井田志
藤村祐
藤晴悟
斉山岳
小藤弘
小原裕
大森巳
阿部洋
岡田勝
青山俊
渡辺潤
村田也
道良
沼又二
千田元
田葉博
高橋正
道公
吉田昌
吉田之
柳沢直
八重樫弘
中田晋
高橋龍
佐藤介
佐々木明
佐々木義
笹井則
桜井峰
昆井雄
黒田保
高橋実典
高橋晋
川村実
三田地康
細川二
木川幸
工藤文
工藤公
工藤克
大沢勝
大坪雄
大沢田守
遠藤正
菊池樹
川村敬
小泉國
小泉雄
川畑藤
川代浩
村田樹
村川健
道又清
東野一
橋本成
沼幹紀
西木根
中村哲
中村和
中村健也
中村聡彦
中條一信
富岡智之
千葉靖博
田葉直
高橋志
高橋英
高橋斉
高橋俊樹
高橋夫
杉沢治
関中英
沢本樹
澤田貴
澤口臣
佐々木和裕
佐々木勇司
佐々木人
佐々木敬
佐々木博
坂本恒
坂本弘
斎藤四
小西修
工藤裕之
工藤希敏
工藤典
工藤聖
工藤克人
川畑也
粕谷実
小山田昌
太田勝弘
遠藤行
岩渕晋
猪館稔
狩野久
良志
一
米沢裕
米内幸
吉村淳
夫
村澤亨
古沢英
石川浩
柳沢貴
晴山祥
西村泰
谷藤悦
福井久
幅信雄
鳥居明
足沢智
田口享
滝川雅
関昌章
笹森洋
佐々木学
佐々木信
佐々木幸
佐々木達
佐々木雄
佐々木淳
佐藤一
斉藤聡
斉藤雄
斉藤晴
小泉彦
工藤聡
工藤優
佐々木光
工藤司
工藤公久
工藤克之
木川勝雄
田村真
佐美一

第31回生

竹花国
竹木信
竹田良
竹田中
竹内雄
竹花信
竹木聡
竹田司
竹内一
佐藤光
佐藤学
佐藤由
高橋美
高橋淳
田中義
中村明
吉田之
吉田昌
和田健一郎
在原俊
片岡徹
近藤尚
佐々木均
谷藤敏
西村典
晴山久
柳沢祥
角舘悦
角館秀
堰合正
堰合樹
丹野貴
千葉和
中川祥
中村浩
石戸明
一戸秀
岩渕行
岩館稔
岩渕晋
遠藤久
遠藤志
太田明
小山田勝
粕谷昌
川畑実
工藤弘
工藤敏
古川修
古澤信
向淳
浜田也
福井徹
福井信
福井明
足沢智
足沢享
田口雅
滝川章
関昌洋
関克典
笹森学
佐々木信
佐々木幸
佐々木達
佐々木雄
佐々木淳
佐藤一
斉藤聡
斉藤雄
斉藤晴
斉藤彦
小泉聡
工藤優
坂下修
坂下正
越水樹
小泉由
小泉卓
川畑浩
川代雄

第32回生

石川貫
石土澤康
石川浩
石戸亨
石井清
石川修
石井郁
一戸英
糸坪浩
遠藤孝
小野寺逸
大竹教
佐々木文
佐藤雅
佐藤美
佐藤浩
佐藤圭
佐森健
佐々木崇
佐倉一
斉藤光
今野広
小林飛
小林正
熊沢人
菅野輝
兼平久
小野寺健
小笠原学
小笠原悟
小田島右
小笠原門
大矢広
大玄仁
大良憲
太釜之
大川範
大川博
大犬嗣
犬飼俊
池野和
阿部裕
余地敬
吉田太
森岳順
一夫

第33回生

高橋哲
高橋信
玉沢明
玉沢靖
玉沢徳
中川浩
中村市
千葉博
丹野明
堰合貴
佐藤久
佐藤正
佐藤巳
小野申
小野寺三
井上知
渡辺法
渡辺賢
三田地司
松崎泰
松崎安
花井邦
千葉裕
田中夫
高橋満
高橋健
高橋和
佐藤一
佐藤重
佐藤健
鎌田二
小山田榮
小山田雄
小笠原二
岡田祥
大森泰
大森敬
大図義
浦波仁
浦波和
砂子田郎
池田進
若柳健
若柳惣一
南館俊
難波洋
難波知
難波保
笹井昭
笹井夫
桜井峰
桜井雄
昆井保
高橋典
高橋克
高橋勉
高橋彦
高橋晋
高橋実
黒田之
川村康
三田地二
細川幸
木川文
工藤勝
工藤克
工藤雄
大沢樹
大坪守
大沢正
遠藤敬
大沢蔵

第34回生

高橋由
高橋淳
高橋美
高橋聡
高橋優
高橋満
高橋雄
高橋國
高橋彦
高橋慶
高橋一
高橋淳
高橋希
高橋一
高橋樹
高橋俊
高橋治
高橋英
高橋直
高橋志
高橋斉
高橋俊
高橋夫
高橋英
高橋直
高橋靖
高橋博
高橋幸
高橋克
高橋志
高橋久
高橋瀬
高橋川
高橋和
高橋也
高橋敏
高橋本
高橋沼
高橋崎
高橋原
高橋一
高橋毅
高橋原
高橋元
高橋昌
高橋明
高橋英
高橋人
高橋信
高橋彦
高橋聡
高橋二
高橋信
高橋之
高橋典
高橋嗣
高橋一
高橋治
高橋哲
高橋也
高橋彦
高橋和
高橋裕
高橋生
高橋裕
高橋俊
高橋人
高橋斉
高橋樹
高橋英
高橋直
高橋志
高橋靖
高橋博
高橋幸
高橋克
高橋也
高橋行
高橋晋
高橋明
高橋久
高橋瀬
高橋川
高橋拓
高橋也
高橋優
高橋寛
高橋均
高橋啓
高橋悦
高橋和
高橋宏
高橋敏
高橋巳
高橋信
高橋明
高橋尚
高橋樹
高橋正
高橋祥
高橋悦
高橋久
高橋雄
高橋勝
高橋俊
高橋治
高橋夫
高橋英
高橋直
高橋成
高橋人
高橋一
高橋毅
高橋原
高橋一
高橋男
高橋藤
高橋原
高橋和
高橋沼
高橋崎
高橋本
高橋敏
高橋明
高橋崇
高橋江
高橋堀
高橋沢
高橋松
高橋南
高橋向
高橋村
高橋村
高橋村
高橋盛
高橋吉
高橋和
高橋阿
高橋部
高橋知
高橋池
高橋野
高橋敬
高橋太
高橋郎
高橋小
高橋山
高橋田
高橋大
高橋助

第35回生

佐藤正
佐藤潤
佐藤卓
佐藤秀
佐藤造
佐藤夫
佐藤淳
佐藤一
佐藤哲
佐藤雅
佐藤浩
佐藤圭
佐森健
佐々木崇
佐倉一
斉藤光
今野広
小林飛
小林正
熊沢人
菅野輝
兼平久
小野寺健
小野寺学
小野寺悟
小笠原高
小笠原広
小田島門
乙部秀
宍戸仁
宍戸元
下川原忠
菅宏
瀬川樹
瀬川和
瀬川拓
瀬川也
西村宏
西野樹
西野亨
中村克
中村志
高橋久
高橋瀬
高橋川
高橋拓
高橋也
高橋優
高橋寛
高橋均
高橋啓
高橋悦
高橋和
高橋宏
高橋敏
高橋巳
高橋信
高橋明
高橋尚
高橋樹
高橋正
高橋祥
高橋悦
高橋久
高橋雄
高橋勝
高橋俊
高橋治
高橋夫
高橋英
高橋直
高橋成
高橋人
高橋一
高橋毅
高橋原
高橋一
高橋男
高橋藤
高橋原
高橋和
高橋沼
高橋崎
高橋本
高橋敏
高橋明
高橋崇
高橋江
高橋堀
高橋沢
高橋松
高橋南
高橋向
高橋村
高橋村
高橋村
高橋盛
高橋吉
高橋和
高橋阿
高橋部
高橋知
高橋池
高橋野
高橋敬
高橋太
高橋郎
高橋小
高橋山
高橋田
高橋大
高橋助

第36回生

太田
大久保
宇津野
石川
阿部
青田
吉田
本宮
三浦
古屋敷
馬場
永山
中村
千葉
田葉
関中
沢本
澤田
澤口
佐々木
佐々木
佐々木
坂本
坂本
斎藤
小西
工藤
川畑
粕谷
小山田
太田
遠藤
岩渕
岩館
猪狩
米沢
米内
吉村
古澤
柳沢
晴山
西村
谷藤
竹花
佐々木
近藤
片岡
在原
和田
吉田
吉田
柳澤
八重樫
中村
田中
高橋
佐藤
佐々木
佐々木
佐々木
佐々木
斉藤
斉藤
小泉
工藤
菊池
川村
大坪
大沢田
遠藤
太田
長
朗
雅
真
澄
広
望
寿
浩
茂
人
信
元
元
正
人
聡
信
之
博
恒
四
修
裕
希
久
一
晋
人
聡
雄
雄
雄
雄
淳
雄
聡
雄
彦
聡
優
満
國
正
毅
樹
貫

第37回生

相浦明成
青山祐司
新井清郁
石井清
石川修
一戸浩晃
糸坪英
遠藤孝
小野寺忠逸
大竹教文
佐藤雅
佐藤浩
佐藤圭
佐森健
佐々木崇
佐倉一
斉藤光
今野広
小林飛
小林正
熊沢人
菅野輝
兼平久
小野寺健
小野寺学
小野寺悟
小笠原高
小笠原広
小田島門
乙部秀
宍戸仁
宍戸元
下川原忠
菅宏
瀬川樹
瀬川和
瀬川拓
瀬川也
西村宏
西野樹
西野亨
中村克
中村志
高橋久
高橋瀬
高橋川
高橋拓
高橋也
高橋優
高橋寛
高橋均
高橋啓
高橋悦
高橋和
高橋宏
高橋敏
高橋巳
高橋信
高橋明
高橋尚
高橋樹
高橋正
高橋祥
高橋悦
高橋久
高橋雄
高橋勝
高橋俊
高橋治
高橋夫
高橋英
高橋直
高橋成
高橋人
高橋一
高橋毅
高橋原
高橋一
高橋男
高橋藤
高橋原
高橋和
高橋沼
高橋崎
高橋本
高橋敏
高橋明
高橋崇
高橋江
高橋堀
高橋沢
高橋松
高橋南
高橋向
高橋村
高橋村
高橋村
高橋盛
高橋吉
高橋和
高橋阿
高橋部
高橋知
高橋池
高橋野
高橋敬
高橋太
高橋郎
高橋小
高橋山
高橋田
高橋大
高橋助

第38回生

高橋哲
高橋保
高橋夫
高橋英
高橋直
高橋志
高橋斉
高橋俊
高橋夫
高橋治
高橋哲
高橋也
高橋彦
高橋和
高橋裕
高橋生
高橋裕
高橋俊
高橋人
高橋斉
高橋樹
高橋英
高橋直
高橋成
高橋人
高橋一
高橋毅
高橋原
高橋一
高橋男
高橋藤
高橋原
高橋和
高橋沼
高橋崎
高橋本
高橋敏
高橋明
高橋崇
高橋江
高橋堀
高橋沢
高橋松
高橋南
高橋向
高橋村
高橋村
高橋村
高橋盛
高橋吉
高橋和
高橋阿
高橋部
高橋知
高橋池
高橋野
高橋敬
高橋太
高橋郎
高橋小
高橋山
高橋田
高橋大
高橋助

第39回生

上原豊　上平真也　菅野廣暁　菊池学　菊谷和弘　工藤忠寛　久保俊雄　熊谷敦　栗谷川肇　小林勇雄　斎藤明典　佐藤克幸　佐藤毅　佐藤真範　沢藤広太　下河原宏記　高橋明　高橋利明　高橋浩基　田口哲也　田屋義昭　千葉長進　千葉智彰　照井裕悦　外岡潤一　中村晋

西野秀俊　野中勝也　東幸男　正木孝典　松坂剛　松本光司　村上智規　森和生　八重樫師章　吉田明　吉田秀一　吉田徹

〈団体〉
桜栄会（旧11回）
紫桜会（新18回）
釜石地区石桜会

〈法人関係〉
第一商事㈱（柴田義春）
㈱佐藤被服（佐藤吉助）
㈱ホテル大観（佐藤義正）
岩手ペニヤ㈱（藤井卓）
岩手魚類㈱（藤田雄平）
㈱盛田カバン専門店（盛田クニ子）
㈲ホテル三春（桑原ミネ）
㈱下河原組（下河原善嗣郎）
マルトク靴店（斎藤洋祐）
㈲佐々木組（佐々木嘉七）
㈲小原商店（小原圭司）
小野寺木材㈱（小野寺国祐）
和山物産㈱（和山謙一）
㈱藤沢体育堂（藤沢省三）
松栄商事㈱（佐藤正三）
千葉起工㈱（千葉勝之）
㈱上田商店（上田清六）
岩手自動車販売㈱（山田三郎）
㈲ミタケコンクリート工業（菊地弘）
㈱白馬堂（原嶋由道）
工喜建設㈱（鈴木雄寿）
盛岡石油㈱（井上保）
菊の司酒造㈱（平井洌）
㈱盛岡共同印刷（小林隆）
山口北州印刷㈱（山口徳治郎）
㈱丸岩（畑中幸雄）
岩手県北自動車㈱（八重樫昌弘）
㈱角登商店（伊藤一也）
斎福商事㈱（斎藤昌三）
㈱金谷（金谷栄治）
㈲砂子沢釣具店（砂子沢光雄）
岩手阿部製粉（阿部淳也）
小山田林業（小山田ミイ）
山三巧建㈱（篭屋徹）
岩手コクヨ（池野和夫）
㈲山善菓子舗（井上務）
㈲伊藤楽器店（伊藤定吉）
丸光商事（古館和男）
東野建設（東野久松）
オーエーブレイン㈱（高橋剛）
盛岡ターミナルホテル㈱（大泉信太郎）

〈教職員〉
・本校卒業生以外
池口杜孝　伊藤秀一　遠藤清安　小畑勝行　高橋一義　高橋三郎　高橋仙一　中館脩悦　中村嘉明　原田信雄　馬場悟　東館専治　松田圭二　村上昭市　本館公治　山本健二　吉田長作

三田義正翁について

牟岐喆雄

母校の創設者三田義正翁についての「義正翁を語る会」は昨年発足、既報の通り、昨年3月研究会ももたれた。次の文章は同会会長牟岐梧楼氏（旧13回）の父君で、昭和8年から21年まで母校の教頭をされた牟岐喆雄氏（元県教育委員）から西在家教頭の手元に寄せられたものである。

私の尊敬する人は数多いが、その中でも特に忘れ得ない人が二人いる。一人は岩手中学校（現在の岩手高校）の創設者三田義正翁であり、他の一人は本州の南端、山口県出身の元の二松学専門学校の校長山田準先生（号は済斎）である。一方は剛の人であり、他方は温容玉のごとき軟の仁であった。山田先生は当時における日本の陽明学の大家である。

ここでは三田義正翁について縦の情報という面から取り上げてみたい。

三田翁は、五十余年前の昭和十年の十二月三十一日に亡くなられた。人間の煩悩を追放するためといわれる除夜の鐘がやがて鳴り響くであろう午後八時、あたかも人間の煩悩は既に卒業したかのごとく言々句々、これが彼岸に旅立つ人の遺言かと思われる迫力のある言葉を最後にあの世に旅立たれた。

紙面の関係もあり、私と三田翁との関係は略して、私が翁を尊敬するゆえんのものを述べたい。

その第一は育てることに徹した方であることである。よく世間では「三田氏の事業はソロバン抜きである」と評していたが、三田翁とて事業家である以上、損益を無視することは許されない。要は仕事への愛情と将来を透視する眼力があるかどうかの問題である。

私はかつて学生時代の夏休み、翁のお供をして翁の経営する山林をあちこち歩いたことがある。そのとき苗木が立派に生育している姿を見ての翁の微笑は、現在でも眼前に髣髴たるものがある。盛岡市の蛇の島の農場は北上川沿岸にある荒れ地であったが、それを今日見られる農場にしたのは、ものを育てる愛情の結果であり、将来を透視する眼光の鋭さによるものである。岩手中学校の創設も単に生徒を救済するとか、収容するのが目的ではなかった。指導者の養成であり、人物を育てることであった。

翁を尊敬する第二の理由は、大盛岡市の建設であった。当時の盛岡は駅と開運橋の間に商店はあったが、肴町とか本町のあたりであって実現はしなかった。現在は水の需要も多く、ダムの建設などもあって、その必要はなくなったが、翁の盛岡建設に熱意のあったことは想像に難くはない。

翁を尊敬する第三の理由は、広い視野と深い洞察力をもっていたことである。明治時代盛岡市内丸に商店を開き、欧州から産業用火薬類や猟銃を輸入して販売したのは、世の中は土木工事にダイナマイトを使い、狩猟への関心が高まっている時代であることを知ってのことである。私が他から聞いたことによると、三田商店の今日あるのは盛岡人のみが対象ではなく、広く世間を相手としてのことと評している。

今日の政治家は本音と建前論を混同し、人と己を欺いて自分の利を考えている人は多いが、政治にも翁のごとき傑物の出現を期待したいものである。

（S62・6）

62年度は石桜振興会に六十六万二千円

岩手中・高校生のクラブ活動を支援し、文化事業を助成、母校の振興、校風の維持発揚をめざす石桜振興会には本年度も次のように寄付金が寄せられた。左に62年4月から2月までの分を掲げ敬意と感謝を捧げたい。

新7回生より　一〇、〇〇〇円
新13回生より　三、〇〇〇円
九桜会より　三六、〇〇〇円
重暉会より　四〇〇、〇〇〇円
旧1回生より　三、〇〇〇円
旧15回生より　一六、〇〇〇円
新22回生より　一五、〇〇〇円
東京石桜会より　四三、〇〇〇円
新13回生有志　二四、〇〇〇円
矢巾石桜会　三〇、〇〇〇円
石桜35会　五〇、〇〇〇円
釜石地区石桜会　三、〇〇〇円
計　六六二、〇〇〇円

元理事長三田義一氏から母校図書館へ

蔵書558冊が寄贈される

元理事長三田義一氏は東京都港区元麻布の私邸で、長く療養中であられるが、おびただしい蔵書の中からその一部が母校図書館に寄贈された。

古くは大正の年大鐙閣から発行のマルクス全集をはじめ明和40年代発行のものに至る558冊である。

林学・経済学・思想史などの多分野にわたり、福田敬太郎著の市場論など貴重な文献が含まれているので、次にその一部を紹介する。

日本歴史大辞典20巻　河出書房
第二次大戦回顧録24巻　毎日新聞社
W・チャーチル
歴代内閣物語上下2巻　時事通信社
新修萬葉紀行　創元社
永遠の実（ケネディ大統領の生涯と業績）　時事通信社
日本科学技術史　朝日新聞社
イギリスの義務教育　應応通信
アメリカ林業発達史　地球出版
大胆になる法　実務教育出版

支部だより

東京石桜会
今年の計画案決まる

東京石桜同窓会（辻公一郎会長＝旧12回）では、①同窓会の開催②名簿の発刊③会旗の製作などの新年度活動執行部案を決定。5月中旬に開かれる理事会にはかって実施することになった。

昭和63年度同窓会は千葉勝之実行委員長（新10）を中心に新旧10、20、30回生（昭33、43、53年卒）が協力して10月中～下旬、昨年と同様に東京八重州富士屋ホテルで開催される予定。

会員名簿の発刊は、前の発行から5年が経過して、前回の名簿収録会員の650名が今日では約8500名に増加していること、さらに住所、勤務先の変更がかなりあることなどに対応するもの。

会旗の製作は、校章と東京石桜同窓会の文字を青地に白く染め抜くもので、中・高の二種類を製作する。

これまでは同窓会の都度母校から発送していただき使用していたが、それでは相互に手間と送料がかかり紛失の怖れもあることから今回製作を計画した。

東京石桜会は昭和58年に山中順三前校長の強い要請で再開されるようになったもので、それまで中断されていた「岩中会」の名称を「東京石桜同窓会」と改称再スタート、その後毎年開催され今回で6回目を迎える。

「母校の発展と会員相互の親睦」を目的に、活動に関しては「出来ることからやっていこう」をモットーとして、年一回の同窓会と会員名簿の発行を主な活動としている。当初約4500名の会員が今日では約8500名に増加している。

昨年の同窓会は10月24日三田義之理事長、山中順三前校長、盛岡から遠藤貫中校長、吉田長作先生、松見得明同窓会会長、さらにはじめて故三田義清前理事長夫人の紅一点の出席もあって大いに盛り上り、和気あいあいのひとときを過ごした。

名簿の発行に関して、事務局では「卒業生並びに関係者でまだ登録していない方、住所その他の変更がある方はぜひ連絡してほしい」と呼びかけている。

〈事務局＝東京都〉

新15回同期会

11月14日久慈市北限閣に50名が参会、久慈義昭氏（新15回）の久慈市長三選と三田地利之氏（新15回）の北大教授就任を祝して乾杯した。

矢巾石桜会

1月8日盛岡市南部会館にて新年交賀会を開催。30名が参会。

石桜35会（新12回）

1月22日盛岡市盛岡グランドホテルで52名が参会して、石桜35会結成祝宴。

釜石地区石桜会

2月15日釜石市松節庵で18名が参会。ゲストは松見同窓会長、西在家教頭。

OB短信

足沢至先生（旧15）11月11日私学教育の功により岩手県知事表彰を受ける。

遠藤貫中学校長（旧1）11月27日私学教育振興の功により文部大臣表彰を受ける。

高橋克彦氏（新19回）は同じく盛岡市在住の江戸川乱歩賞作家中津文彦氏とともに12月12日盛岡市勤労福祉会館で岩手日報主催の講演会で講演した。

佐々木一郎氏（旧3回）は1月11日から30日まで岩手銀行中ノ橋支店レンガギャラリーで「建物と水のかかわり」をテーマに冬の風景油彩画を展示した。

村上誠氏（新17回）は2月1日から29日まで盛岡市材木町岩泉純木家具ショールームで「今日の壁」と題して作品展を開催した。

故鷹觜幸一氏（旧3回）油絵遺作展は2月27日から29日まで盛岡市県自治会館で開催された。同氏は紫波町出身で昨年2月死去されたが弟の画家直治氏が取り運んだものである。

編集後記

昭和十三年の移転から五十年、奇しくも体育館等の完成、沿革にも一つの節目ができたように思う。

大沢川原時代の面影を残していた雨天体操場も今はなく、一抹の寂しさを感じるが、しかし、これもやむを得ないところであろう。

今回は校舎完成記念号ということで、年度内二回の発行となり、会長さんをはじめ、山口北州印刷さん他多くの方々の協力をいただいた。有難うございました。

（K）

月星化成株式会社岩手県総代理店
履物総合卸商社
斎福商事株式会社
岩手県紫波郡矢巾町流通センター南一丁目6-4
TEL ㈹(38)2131

販売特約店
あなたの記録更新に役立つスポーツ品〔駐車場完備〕
藤沢体育堂
本店／盛岡市大通3丁目2　☎0196(23)1435
ニチイローズタウン／☎0196(38)1257
盛岡駅ビルフェザン店／☎0196(23)1606
花巻店／☎0198(23)2639

カメラの一番安い店・スピード写真
カラー・D.P.E・各種出張撮影
盛岡カメラ
池ノ谷忠正
材木町信用金庫向　TEL(22)7457